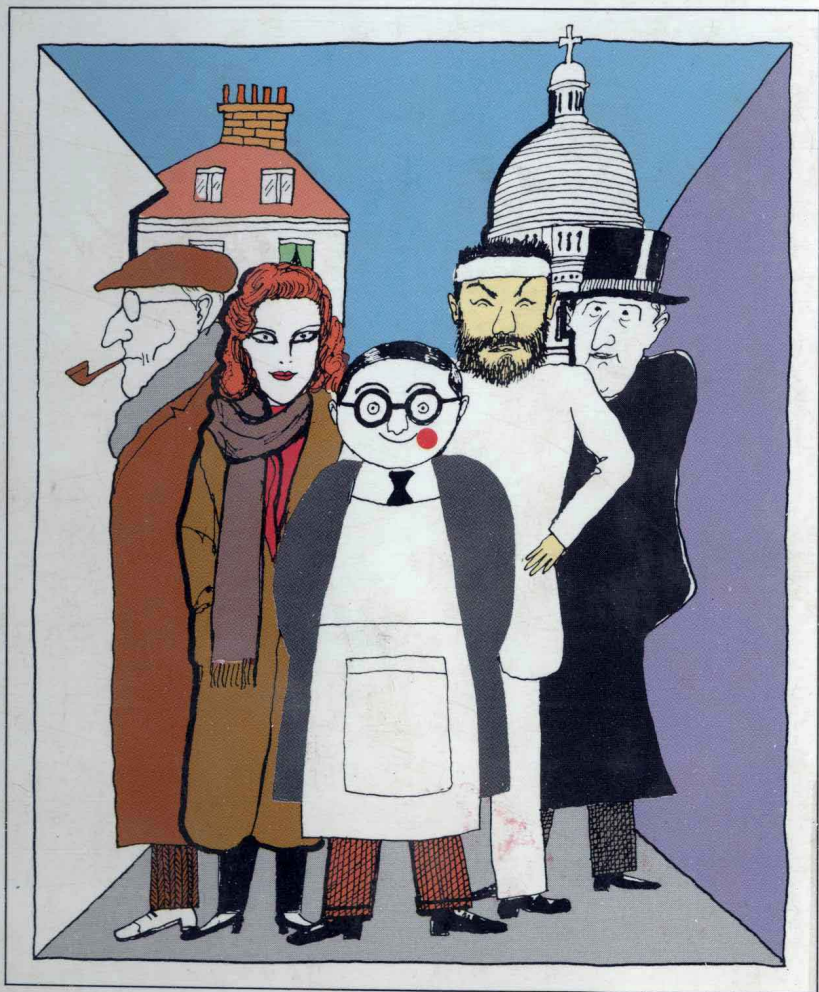


頭医者留学記

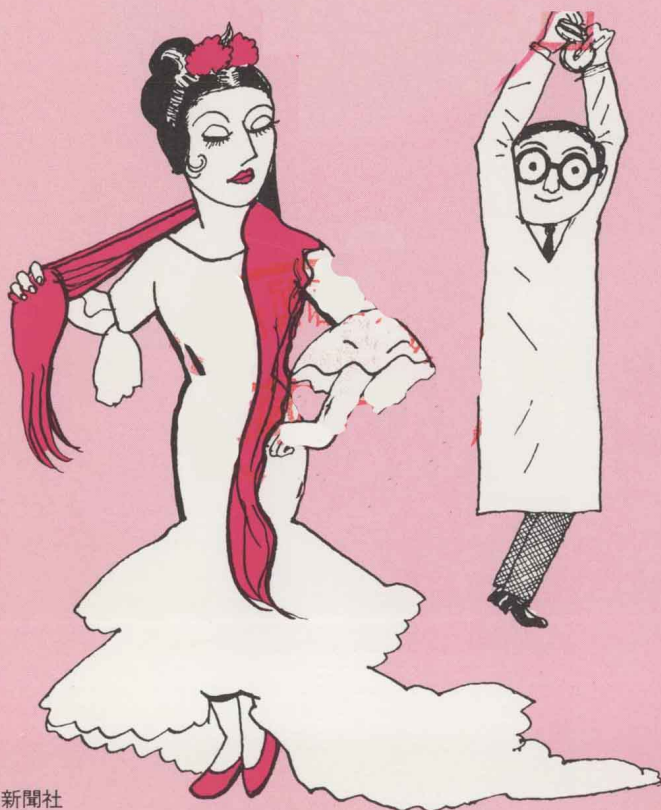
加賀乙彦



毎日新聞社

留学記

加賀乙彦



あたまい しやりゆうがくき
頭 医 者 留 学 記

定価八八〇円

一九八三年一月二〇日 印刷
一九八三年二月五日 発行

著 者 加賀乙彦

編集人 川合多喜夫

発行人 関根望

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇 名古屋市名区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

頭医者留学記 目次

- 1 インド洋ノイローゼ 7
- 2 おおヨーロッパ 24
- 3 色情狂 40
- 4 ポンポン先生 56
- 5 日本館紳士録 82
- 6 パリ医師会 99

12	喜劇は終りぬ	203
11	田舎医者	187
10	暖炉は燃える	171
9	かわいい男	155
8	父来たる	138
7	グラナダの春	122

装幀と挿画
畑農照雄

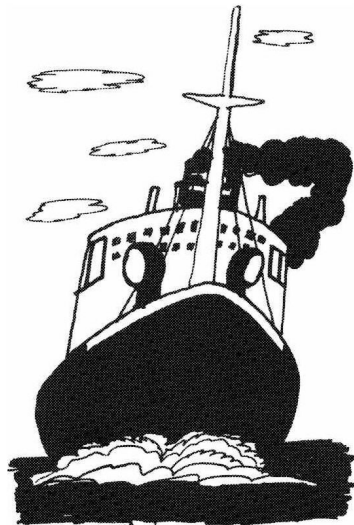
頭医者留学記

1 インド洋ノイローゼ

一九五七年九月四日、記念すべき日だ。なんて言ったところで誰もそう思いはしないだろうが、おれにとっては一生忘れられぬ日、船に乗ってフランスへ出発した日である。いまどき、フランスへ行くなんて何でもありはしないけれども、敗戦後十二年目のその当時は、まだ外国旅行が珍しかった。

運賃は飛行機で三十万円、船で二十万円、むろん船で行ったのは雇われの貧乏医者、飛行機賃が払えぬからだ。

T大の医局の連中がすこしに、母と弟が送りに来てくれた。台風が迫っているため強風で、一所懸命投げかわしては手摺てすりに結びつけたテープはあっけなくちぎれてしまった。最初の寄港地は残念



ながらまだ神戸。しかしもう日本と縁が切れた感じで、おれは横浜の港と街とを見送った。精神医になつて丁度三年、二十代の若僧で臨床経験も未熟だし、殊勝にも学問せんものと始めた死刑囚の研究も中途半端、もつと日本でやるべきこと山のごとしと思つたのだが、外国、ヨーロッパ、フランスへの旅もたのしく、それに日本での猛烈無残に多忙な生活からも解放された思いで、おれはい気分だった。さて荷物の整理でもしようかと船室にもどつた。ツーリスト・クラス（二等）、つまり後部甲板と同じ高さ、右の外側の四人部屋である。鍵を鍵穴に差しこもうとしたが入らない。誰かが内側から鍵穴をふさいでいる。ノックし、叫んだ。答はない。すると同室の生物学者がのつぺり長い顔で近付いてきた。この男、初対面の挨拶をした際、「ぼくは微生物学者で、ゾウリムシの新陳代謝を研究しているんです」と言つたので、ゾウリムシとはどんな虫か知らんが、こいつの長い草履形の顔にはびつたりだと決め、たちまちゾウリムシと綽名をつけてやつた。

「あかないでしょう。中にいるんですよ」ゾウリムシは、微生物みたいに水に親和性のある濡れた声で言つた。

「誰がいるんでしょうね。困っちゃうな」

「教授ですよ。ほら、工学部の教授」関西の某市の工大教授は、よわい四十ぐらいの首の太い人だ。「何をしてるんでしょうね」

「お金を勘定してるんですよ。さっき鍵があいてたんで飛びこんだら、ベッドの上にドルの札束をばらまいて金勘定のまっさいちゅう、驚いたのはむこうで、ぼくを押し出すと、内側から鍵を掛け

「ちゃった」

「金勘定ですか、するとまだ時間をとりそうだな」

「なにしろ、ちょっとやそつとじゃ、数え切れん何万ドルの大金らしいから」

何万ドルの大金とは羨ましい。その頃の日本はまだ敗戦国貧乏国で、普通の人は外貨が入手できず、公式のレートは一ドル三百六十円のところ、四百五十円から五百円で闇ドルを買うより仕方なかった。そんなつてのないおれは、日用品を買う程度の僅かのドルしか持っていない。もし教授が何万ドルを持出したとなると、これは違法行為である。大学教授てのは度胸があるもんだと感心した。

そこへ、やはり同室のドイツ人が来た。赤毛の小男で雀斑だらけの顔だ。名前はフォッケウルフといういかめしい。あとで辞書をひいたら、前檣下帆小錨ぜんしやうかはんしやうびょうという船乗りゆかりの名で、もつとずつとあとで、第二次大戦で活躍したナチの戦闘機の名でもあるとわかったが、ルナールの「にんじん」を舞台で見たばかりだったおれは、ニンジンと素直に名付けることにした。微生物学者はなかなか学があり、流暢なドイツ語で事情を説明してやる。するとドイツ人は、拳こぶしで鉄ドアをなぐり、わめきだした。肉食人種らしく、執拗しつごうに何度でも繰返す根気におれは敬意をおぼえた。何かというとすぐあきらめて、莫迦ばかのように待っている、おれやゾウリムシとは精神の構造が違ふ。ドアが開くや飛びこんで教授に何か文句を言っている。ブルンデングルンデンのドイツ語だ。

が、教授は平気だ。自分のトランクに鍵を掛け部屋の隅に押ししていくと、自分のベッド、つまり

おれの真上にのぼってしまった。

円窓が一つある細長い部屋で、左右の壁に二段ベッドがある。おれが右下、上が教授、むかいの左下がニンジン、上がゾウリムシだ。ツーリスト・クラスの旅客は窓のある四人部屋と窓のない二人部屋を選択できると言われた時、もちろん景色の見える方をおれは選んだのだった。

荷物の整理をやるうとして、すぐ面倒になった。洗面道具とパジャマとガウン、つまり夜になったら必要なものだけを出して、ベッドに横になった。すぐ睡ねむくなり、目が覚めたら夕食だった。フランス語で放送している。

言い忘れたが、おれの乗ったのはフランス船でカンボジ号というのだった。フランス郵船会社が極東航路に持つ快速船の一隻で、他はラオス号、ヴェトナム号、つまりすべて旧植民地の名をつけてあった。

ツーリスト・クラスの食堂だから、そう立派ではない。しかし、フランス人の給仕でフランス料理が食える。しかもなかなかの御馳走だ。席は自由なので、おれは二人の仏文学者が仲むつまじく並ぶテーブルへ割りこんだ。

山岡という私立大学の仏文の助教授だか講師だかがいる。浅黒い顔の上に長い髪の毛をオールバックに押えつけ、なかなかダンディだ。名前は鉄秀で、名字と続けると何だか聞いたような姓名となる。江島勉強という本当に勉強家みたいな男がいる。先方はおれを知らないだろうが、おれのほうはこの勉強で充実して丸くなった顔をよく知っている。というのは、彼はおれがフランス語を習

いにいった日仏学院の図書掛りをしていて、本を借りる時には伝票を渡したし、期末試験の際は試験監督に来て、監督なんかそっちのけで、フランス語の本に読み耽かっていたからだ。

周囲を見渡すと、外科医の大橋、法学者でやはり、どこかの大学の助教だか講師をしている深町、日本人数人、中国人、フィリピン人、インド人母子、中年のフランス人夫妻などの姿が目についた。見たところ、あんまり裕福そうな人はいない。ひとりだけ離れて坐り、気むずかしげに考えこんでいる教授だけが隠れた大金持というわけか。

葡萄酒は飲み放題だ。なるほどフランス船だと感激し、好きな連中ゆえ、ぐびぐび飲んだ。おかげですぐ睡気をおぼえ、船室に帰るやぐでんと寝てしまった。ところが明け方、猛烈な騒音に目が覚めた。タイプライターの音だった。電燈を明るくつけ、洗面所の流しに板をわたし、その上で打っているのは教授だった。ニンジンが何かドイツ語で抗議するのをゾウリムシが通訳している。

「うるさくて眠れないと言ってますよ」

「これ神戸につくまでに打たんとかかんのですわ。学会誌の論文でね」

「しかし……」

「まあ、がまんせい言うてください」

タイプはいっこうやまぬ。あきらめたのか寝付きがいいのかニンジンが眠ってしまった。大きないびきである。タイプといびきの二重奏だ。ゾウリムシは本を読みだした。おれは伝家の宝刀、睡眠薬だ。朝の起床時刻まで効くよう量を調節してのみこんだ。

また猛烈な騒音、教授の目覚まし時計が鳴っていた。午前六時だ。まだ暗い。ベルをとめると、教授は勢いよく飛び起き、「さ、朝だぞ」と叫ぶと、トランクをガタピシひっ掻きまわし、運動バツと運動靴をはき、腰につけた鍵音を高鳴らせながら飛び出していった。

「どうも驚きましたね」とゾウリムシが溜息をついた。「これから毎日、こんなんですかな」
「そのようですな」おれは睡眠剤でぼんやりした頭で答えた。

神戸に着くと、降りて気晴しする人が多かつたが、おれはもう日本の土を踏む気になれず、船内にとどまった。教授はさすが関西が本拠らしく、学生たちが大勢見送りに来、美人の女房も来た。しかも、女房は、また一束のドル札を持ってきて、「ちよつとこれ外套の襟の中に縫いこむ間、外に出て下さい」と、同室のおれたちを追い出した。似合いの夫婦だ。

やっと日本を離れ、玄界灘に出たとたん、嵐となった。フランスの誇る快速船ゆえ、小山の波濤などものともせず突進するかわり、ものすごい揺れかただ。おれは医学部卒業の時、船医を志したほどで船酔いなどかつて経験したことがなく、暴風もまた愉快なりと強がり、青い顔の教授よ、いい気味だ、ゾウリムシよ、原始生物の霊にでも祈って頑張れとはしゃいでいたところ、夕食になつたらまるで食欲がない。それでもなお強がりをして食堂に行ってみたら、坐っているのはニンジンとおれだけ、離ればなれも淋しいので彼のテーブルに移って話しかけた。

無理してドイツ語で話してみた。もちろんカルテに書くおれのドイツ語程度ではあんまり通じるわけがなく、日本語、フランス語、英語をためすと、ニンジン氏わずかにフランス語が話せる。た

だし片言で、フランチ語とも言うべき代物だ。料理が運ばれ、ニンジンは常にまさる食欲でたいらげるが、こっちは見ただけで嘔気がする。葡萄酒の酔いで船酔いをごまかしてやれと飲むうち気分がおかしくなった。食堂を飛び出て、トイレに駆けこんだ。ニンジンが心配そうに待っていてくれて、背中をさすりながら、船室まで腕をとって送ってくれた。

三人はベッドの中でウンウンうなっている。ニンジンひとり元気で寝支度を始めた。まずシャワー室で浴びてき、鏡の前でガウンを脱ぎすて素裸になった。背中に大きな女の顔の刺青がある。日本のように極彩色ではなく、青いぼけた線で乱暴に彫つてある。どう見ても美人ではなく、西洋お岩の亡霊だ。右の腕には同じ色で錨いかりと心臓が彫られ、IMという字が読める。オーデコロンを腋の下と恥毛にすりこむ。それから頭に何やら液体をそそぐ。腥なまぐさい腋臭わきがに加えて強烈な芳香臭が狭い壁の中に充満し、たちまちおれは嘔気を覚えた。ニンジンのヤツ、素裸のままベッドの脇に跪ひざまずき、お祈りを始めた。なるほど身も心も裸のほうが神様に通りがよかろうと感心しているとベッドにそのまま横になった。台風の運ぶ南風で異常な蒸し暑さではあるにしても、素裸まるだしで、何もか
けず寝るとはおそれいった。おや、もう大いびきだ。

二日間ほど荒れに荒れ、三人とも寝たきりだった。窓側に枕があるが、頭がぐうーとさがり、またあがる。この上下動が何とも不快で耐えられない。ニンジンひとり、朝はオーデコロン、食後に葡萄酒、夜はウイスキーの臭においを発散させ、元気であった。しかし、それでも人間とはいかなる環境にも馴れる動物、おれの船酔いは三日目にびたりとなくなった。教授は早朝のタイプライターと

ジョギングを再開した。が、それにもおれは馴れた。一緒に長旅する以上、馴れるより仕方がない。船中で読もうと持ってきた益田教授の『犯罪心理学』を手に、おれは甲板のデッキチェアへ行つた。が、どうも読む気になれない。波、雲、風、時々群をなすイルカなどを見ていたほうが面白い。誰彼をつかまえては話を聞くのも興味がある。

大体おれは医者以外の人間をあまり知らない。むしろ精神医である以上、精神病者には接するし、拘留所に勤めていた一年半の間、多くの犯罪者も知ったが、文学者という人種には会つたことがなかつた。小説や詩のような絵空事えそらごとの研究で時を費やすというのは、どんな種類の情熱であろうか。鉄秀と勉強の二人の仏文学者におれが近付いたのは、そんな好奇心からだつた。さいわい、二人は仲よく並んで本を読むことが多い。

「やあ、古義こぎドクトゥールか」と鉄秀助教けつしゆ教授（講師より上だと勝手におれは決めて昇格してやつた）が、分厚い洋書を脇に置いて会釈した。

「何の本ですか。むつかしそうですね」

「なあにスタンダールです」

「はあ、はあ」おれは犯罪学の恩師益田先生の忠告に従い、『赤と黒』と『バルムの僧院』を読んでいた。しかし、それは牢獄の拘禁こうきん心理を研究するためで、文学そのものに関心があつたからではない。覚えてるのも、獄中のジュリアンにレーナル夫人が面会に来る場面だとか、ファブリスが脱獄するシーンとかだけだ。